

3. 総合的な学習「LIFE」のカリキュラム開発

当校の総合的な学習「LIFE」は何をめざしてきたのか。その特徴を明らかにすることで、当校が提案している「LIFE」のコンセプトならびに概要を紹介する。

1. カリキュラム開発の視点

(1) LIFE以前の学習活動の実践を基に開発した総合的な学習

LIFE は生徒の発達段階に応じ、学び方やものの考え方を基礎として、問題解決や探究活動 に主体的・創造的に取り組む態度の育成を図るとともに、特に高等学校においては自己教育力を高め、自己の生き方についての自覚を深めることに重点を置いたカリキュラムである。

当校では以前から自己学習力の育成や学びの拡がりを見野においた多様な学習活動を展開してきた。それは、生徒の選択による課題探究学習、実験実習を多く取り入れた体験的な学習、実際に現地に出かけての野外学習、自然観察、環境学習、社会見学といった内容であるが、学びを拡げ、教科の枠を越えて学びのつながりを求める学習であった。

総合的な学習「LIFE」では、これまでの実践を基に、学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」のねらいを盛り込む形で、カリキュラムのデザインを行った。全く新たに「総合的な学習」のカリキュラムを開発するのは多くの労力を必要とするが、これまでの実践で蓄積されたノウハウを生かすことで、学校の実態に合致したカリキュラムを創造できるものと考えている。

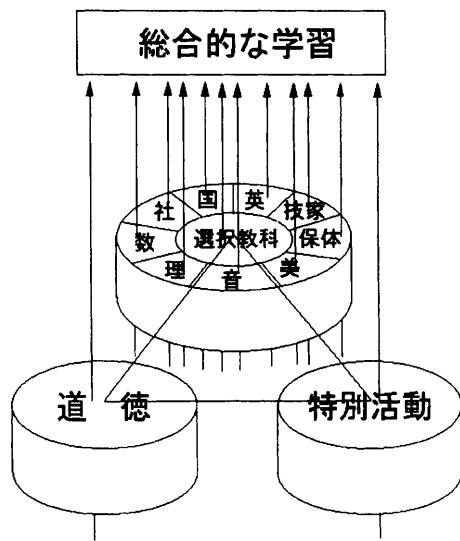


(2) 教科学習を基盤とする総合的な学習

LIFE では、各教科等で身につけられた知識や技能などが相互に関連づけられ、深められ、生徒の中で総合的に働くようにすると同時に、必要に応じて高い専門性を追求する内容が盛り込まれている。

一般に、「総合的な学習」には教科書もなく、学習内容も規定されていないために、そのとらえ方は様々で、この時間を安易に学校行事や教科の補習補充に当てたり、一過性のイベント的な内容や体験のみを重視する偏った実践事例も少なくない。当校では、「総合的な学習」と「教科学習」を車の両輪のような関係と捉え、この二つが相互に有機的なつながりを持ち、学校教育全体の学習活動が活性化されることによって、総体としての教育効果が期待できるプログラムを構成しようとしている。

「総合的な学習」において課題の発見・探究といった自ら学び自ら考える「問題解決能力」の育成や、「自己の生き方」についての自覚を深めるためのカリキュラムを具体的に実現するためには、子どもたちの学習活動において、それらが発揮・活用される場面や仕組みをいかに作っていくのかがポイントとなる。例えば、「自分で問題を発見」して「解決を目指して取り組む」ためには、テーマとなる事項を調べ、まとめた上で、その知識を基に判断し、「疑問」を抱くことが出発点となる。そのためのテーマとしては、結果が分かりきった内容では興味関心は高まらず、生徒が自ら進んで活動することは望めない。表面的な扱いでは不十分であり、深い掘り下げが必要になる場合もあると考えられる。



総合的な学習「L I F E」のカリキュラムでは、各教科の学習が基盤となり、各教科で培った力のネットワーク化をはかる「横断的・総合的」内容であると同時に、高い専門性を追求する学習となるようにカリキュラムのデザインを行っている。高い専門性を提供する基盤は「教科学習」であり、「教科学習」の基盤なくして「総合的な学習」の充実にはあり得ない。また、「総合的な学習」の充実によって「教科学習」が深まり充実するという相互効果が生まれることで、学力を育む「総合的な学習」を構築できると考えている。

図1 「総合的な学習」の位置づけの概念

「総合的な学習」の内容は、教科の領域に基盤をおきながら、特別活動や道徳の内容を包括的に取り込んでいる。

(3)LIFEの学びの意味

LIFE では、課題の発見・探究、情報分析、問題の解決、まとめと発表・自己表現、コミュニケーション、自己評価といった、「総合的な学習」の学びの意味に視点を置いたテーマや単元を配置し、主体的な学びを創造している。単に知識を与えるだけではなく、これまでの教科学習以上に体験的な学習や課題解決を目指した学習を中心に構成し、子どもたちが主体的、意欲的に取り組むことを期待している。また、子どもの学びたい知りたいという欲求や自己を確立しようとする欲求に応え、「知識を受動的に与えられてきた学習」から「新しい知識を能動的に見つけだし、自分なりに発信する学習」へと転換を図ることを目指している。

将来にわたって、自分なりの問いを持って能動的に学習活動を繰り広げ、自分が納得できる自分なりの知の体系を構成していくことのできる生徒を育てる、そのために「総合的な学習」L I F Eが1つの足がかりとなるようにと考えている。

例えば、学習のある場面では、教科学習で身に付けた知識や技能が横断的・総合的に活用される場面を用意し、生徒自らの主体的な学びが展開される場面を用意することで、活発な学習が展開されるような仕掛けを作る。知識や技能に重点を置いた「基礎・基本の習得」の部分があれば、次の場面では、生徒の興味関心を生かした主体的な学習活動に視点を置いた「課題の発見」、「探究」、「体験」、「問題の解決」などの活動があり、さらには、コミュニケーションやプレゼンテーション能力の育成に視点を置いた「発表や表現」など、多様な学習活動を組み合わせたプログラムが用意されているのである。

このような活動を通して、「自ら課題を発見し、自ら学び・・・」といった「自己教育力」や「問題解決能力」、「課題探究能力」が育成され、「自己の生き方」に対する考えを深めることにつながっていくと考えている。つまり、主体的な学びを創造する場として、総合的な学習「L I F E」の時間を活用しようとするものである。

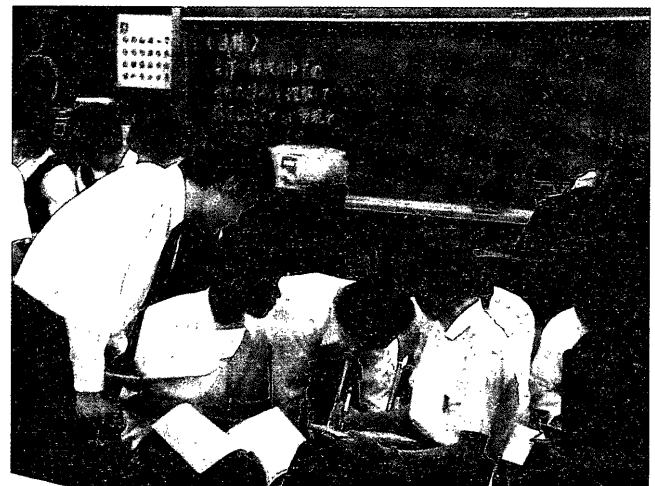


(4)学習の系統性と深化を考慮したカリキュラム

LIFE は、育みたい能力とそれぞれの学年レベルに対応した学習目標を明確化し、中学校・高等学校6カ年の系統性を考慮したカリキュラムとなっている。

学習指導要領では、小・中・高等学校でそれぞれに「総合的な学習の時間」が設置され、取り組まれることになっている。「環境」「国際理解」「情報」「福祉・健康」といった内容は、小・中・高の多くの学校で実践され、学ぶ児童・生徒たちにとっては重複した内容を繰り返し学ぶことにもなりかねない。そこで、中・高一貫校である当校では、中学校・高等学校の各学年の発達段階に応じた学習目標や内容を明確にし、6カ年の系統性を考慮しながら「L I F E」全体の構成を検討した。例えば小学校で同じテーマの総合的な学習を経験した生徒でも、中学生あるいは高校生の発達段階に応じた「目標」を明確にすることで、テーマの重複はあっても「目標」の重複はあり得ないと考えられる。

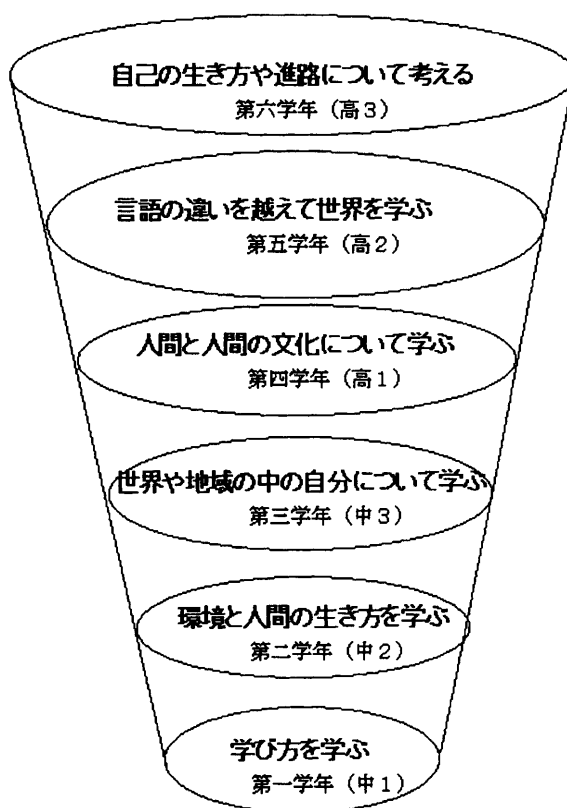
目標を明確にするという観点に立つと、生徒によって学習内容が極端に異なるという「選択制」は避けるべきであると判断した。これまでの実践事例を見ると、例えば「環境・国際理解・福祉」の3テーマから1つのテーマを生徒が選択するといった選択制を取り入れている学校も多く見られる。しかし、この場合テーマ毎に「目標」や「育もうとする力」には違いが生じる。当校の「L I F E」の時間では、探究活動やテーマ設定においては生徒の個性や興味・関心に基づいて自由な設定が行えるものとするが、教育課程としては全生徒が同一の授業を必修で履修するものとし、選択制はとらないものとした。中学校の新教育課程においては、従来以上に選択教科の枠が拡大されている。生徒の個性や興味・関心、あるいは将来の進路を見通して選択を行い、授業を受けることが可能となっている。そうした中で「総合的な学習」の選択制の是非を考えたとき、単に子どもの興味・関心や経験を中心として体験的な活動を組織したのでは、ただむやみに動き回るだけの無意味な活動を生み出すだけで、苦勞の多い割に「総合的な学習」で育もうとする力をつけることができない危険性があると考えた。「L I F E」では、育もうとする力を見据えて、教師の目で見通しを持ってテーマや課題を設定し、確実な力をつけさせたいと考えた。



2. LIFEの概要

以上のような特徴を持つ総合的な学習「L I F E」は、生徒たちに「生きる力」を育むことをカリキュラム構成の基本に置き、情報化社会の中での「学び方」の学習を出発点として、自分と自然や社会、環境とのかかわりについての理解、人間や人間の文化についての理解、そして「自己の生き方」に対する自覚を深めることを目指した、中・高六カ年一貫の総合的な学習プログラムである。

具体的なカリキュラムについては次の章で紹介するが、カリキュラム開発の第1段階として設計された、6年間のテーマの一覧を次に示す。



学年	学年のテーマ
1	学び方を学ぶ 「情報処理能力と自己表現能力の育成をめざして」
2	環境と人間の生き方を学ぶ 「自然と人間，人間と人間の共生をめざして」
3	自己の生きる地域と世界について学ぶ 「地域からの世界理解，世界からの地域理解をめざして」
4	人間と人間の文化について学ぶ 人間の文化や人間についての科学的な理解をめざして」
5	言語の違いを越えて世界を学ぶ 「国際理解や国際協力の深化をめざして」
6	進路と自己の生き方について学ぶ 「未来を切り開いていく態度と自己実現をめざして」

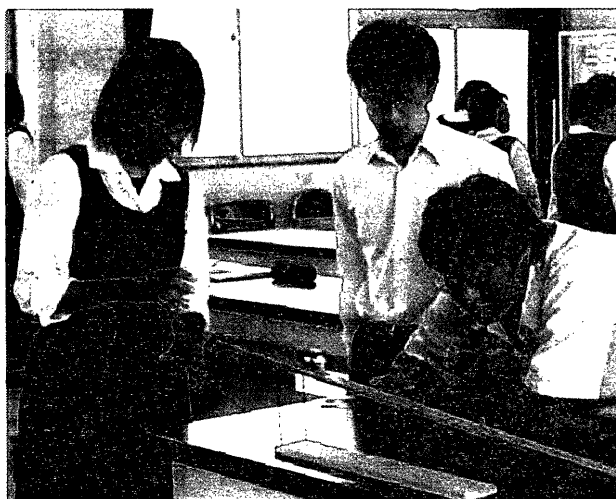
図2 「総合的な学習」 LIFEのカリキュラム構成

構造としては、図2に示すように、第1学年での学習を基礎に第2学年における活動を積み上げ、学年進行とともに深化した内容を目指している。

第1学年の「学び方を学ぶ」は、調べ方やまとめ方といった学びの基本から出発する。コンピュータやインターネットを活用したIT時代の学びをテーマとしている。第2学年の「環境と人間の生き方を学ぶ」では、環境や健康をテーマに第1学年での学びを生かしながら探究活動を中心に構成している。第3学年の「自己の生きる地域と世界について学ぶ」では、「社会見学旅行」といった行事との連携も図りながら中学校3年間を締めくくる研究論文に取り組む。

第4学年（高等学校1年）の「人間と人間の文化について学ぶ」は、当校の総合的な学習「LIFE」を特徴づけるテーマである。一定の方法に即して体系的に理論化された科学や学問の成果としての「知」と、美的な感性、宗教的な価値観等に焦点を当て、それを人間と文化という関係とし

て生徒の成長の中に位置づけることを試みている。第5学年（高等学校2年）の「言語の違いを越えて世界を学ぶ」は、ただ単に国際交流をすることが目的ではなく、交流相手の文化を肌で感じる事が重要な視点となる。こうした目的の国際交流の場では英語を自在に操ることなしには目的は達成できないと考え、できるだけ英語の学習が進んだ高学年で実施することが望ましいと判断した。



「L I F E」を授業の形で時間割表の中に組み込んで実施するのは第5学年までであるが、最終学年となる第6学年（高校3年）では、「進路と自己の生き方について学ぶ」というテーマを設定している。

それまでの「L I F E」における学びを生かし、自らの進路について自己形成や人間としてのあり方を見つめながら主体的に判断して未来を切り拓いていく態度を求める。そこに「総合的な学習」L I F Eの成果が結実するものと期待している。

以上の当校の総合的な学習の特徴を踏まえ、「総合的な学習」を「L I F E (Learning, Identity, Feelings, Ecology)」と命名した。

3. カリキュラム開発の方法

①カリキュラム開発にあたっては、単年度の実験的なカリキュラムではなく新学習指導要領の実施に対応して継続的に安定した状態で運用できることを特に考慮した。そのためには、現在の教員の構成（人数・教科・持ち時間数など）で対応できる内容であること、現在の施設・設備で対応できる内容であることが重要なポイントとなる。

②カリキュラムの骨格の設計にあたっては、全体を通して流れる理念を明らかにした上で、細目を決めるという手順をとる必要がある。学年団や特定の教科に任せただけでは、全体の統一されたカリキュラムにならないからである。当校では、まず、中学校・高等学校6ヶ年を見通したカリキュラムの骨格を決め、その後、学年・教科の枠を超えた開発チームを組織して具体的な学習テーマ・内容の開発に取り組んだ。その結果、各教科の教員が協力し、教科・道徳・特別活動といった1つの領域内にとどまることなく、多面的な視点から学習内容の創造にあたった。

③大学と附属学校の連携によるカリキュラム開発を指向し、研究組織の中に広島大学の各学部の先生方を中心に構成する指導委員会を設置した。カリキュラムの全体的な構成に対して助言をいただくとともに、カリキュラムの内容について具体的な提案を得た。実際の授業の場面においても、直接的な参加を含めて、積極的に関わっていただいている。

